

きたと伺っています。

西野 30数年前、義母・義祖母の介護を子育てしながらしていました。周りの理解もなく情報も少ないなかで24時間一人での介護は、肉体的・精神的に随分追い詰められました。当時の手記に、看護やリハビリなどが施設なみに家で受けられたらいいのにと書いています。まさしく現代の在宅介護サービスですね。いまデイサービスなどの車がまちを行き交っているのを見ると、あの頃から比べると夢のようだと感じます。

野津 私ほちょうど20年前に介護の仕事に就きました。当時と比べ最近では、まちのレストランなど身近な場でも介護の話題を耳にするようになりました。介護の現場としても技術が随分改良されてきたと感じています。以前は介護者が力を込めて高齢者の体を支えていたけれど、いまは本人の持っている力を最大限に生かすよ

うにして支えるという介助がスタンダードです。

宮城 制度スタート時は施設入所の給付が約6割でした。今では在宅介護サービスの利用が増えています。これも自立支援や予防の重要さへと介護の捉え方が変わってきた表れだと思います。

牧里 豊中の変化でいうと、制度開始数年で特別養護老人ホームが7か所もできました。また、平成18年(2006年)には地域包括支援センターを7か所作ったことは他市に比べ画期的。介護の相談は身近な地域からといった考えがベースにあり、社会福祉協議会とも連携して事業が進められてきました。

宮城 当初豊中市福祉公社で行っていたサービスが平成21年に公社と市社会福祉協議会が統合することで地域福祉事業と一体化するなど、福祉・介護において制度以前から地

域ごとのつながりが育まれてきたのが豊中の特色です。ほかに医療と介護の連携に関しても虹ねっと連絡会^{※1}が勉強会を行うなどして園城ごとのつながりを深めました。
※1 虹ねっと連絡会：医療従事者と介護事業者の連携強化に取り組むため、医療と介護の実務者からなる「虹ねっと」の関係機関の代表者で構成される連絡会

制度誕生から20年たった いまの問題は

牧里 介護保険制度が世の中に浸透してきたいま、感じていることはあります。

西野 介護保険のおかげで助かっている、と皆さん言われていますが、介護のしんどさ自体は今も昔も変わりません。長期化・重度化、費用の負担、男性介護、仕事や子育てとの両立など、ストレスから鬱になる人もおられます。

一人です。一人で抱え込まず、つながることが大切です。利用者がどんな復雑化しているか、利用



者には分かりにくいのでは。また、相互扶助への意識が薄れてきたのか、お金を払っているのだから受けてもらって当たり前と考える人もいます。一方でサービスを提供する側も、利用者本位という考えを見失いがちになることも。利用者さんが一番望んでいることと事業が合致するところは何か、と考える毎日です。

牧里 介護はお金次第という考えに傾くのは危険。制度を持続させるためには、相互扶助の考えを忘れてはいけないのですが。

宮城 生産年齢人口^{※2}の減少が見えて



牧里 毎治(まきさとつねじ)さん

関西学院大学名誉教授。平成12年(2000年)から豊中市介護保険事業運営委員会委員長。



西野 玲子(にしの れいこ)さん

豊中市老人介護者(家族)の会副会長。家族の介護をきっかけに同会に入会し、活動を続ける。平成30年(2018年)から豊中市介護保険事業運営委員会市民委員。



野津 昭久(のつ あきひさ)さん

豊中市介護保険事業者連絡会会長。居宅介護支援・訪問介護サービスを事業とする株式会社IC LIFEDESIGN代表取締役。



宮城 節子(みやげ せつこ)

豊中市福祉部部長。高齢者のほか障害者や生活困窮者支援など、長年幅広く福祉分野に携わってきた。

いるこれからは、大変な時代。支える人と支えられる人の立場がいつ逆転してもおかしくありません。国は全世代型社会保障改革を打ち出していますが、市としても給付と負担のバランスをまず検討し、制度が持続していくための仕組みづくりに取り組みなくてはいけないと思っています。
※2 生産年齢人口：15歳～64歳

みんなが考え、参加する これからの介護

牧里 介護保険制度の持続や健全な発展には事業所の存在が大事で、そこで果たすケアマネジャーの役割は大きなものだと感じますが、いかがでしょうか。

野津 確かにケアマネジメントは事業に大きく影響し、介護保険の軸となっています。優秀なケアマネジャー

を集めたり育てたりするための投資はその事業所も課題ではありますが、レベルアップは大切だと思います。

西野 介護スタッフ不足も常に叫ばれている問題ですね。

宮城 技術革新が進んでいるいま、例えばAIの活用など新しい技術も今後視野に入れていく必要があります。AIがケアプランを作り、1件につき15分の効率化がはかれるといわれています。作業時間の短縮が実現できたら、ケアマネジャーが利用者さんと関わることにもっと力を注げるのではないかと期待できます。

西野 老人介護者(家族)の会で介護者の高齢化を目の当たりにしています。80、90歳の人による老老介護も多く、認知症になる人も増加傾向。皆、共倒れにならないかと心配です。だから年齢や介護者の状況を考慮してもらええる仕組みなどもあればいい

る社会になってほしいので、子ども時代から教育に取り入れていくのでは。介護と認知症は誰かが避けて通れないものだから、上手にサービスを使うこと、また地域の理解があったこそ、本人も家族も尊敬を持って穏やかに過ごすことができると思います。

牧里 暮らしの中に根付く、介護文化といえるものを築いていく必要があるのかもしれないですね。介護が面白い、楽しいといえるぐらいの。今まで興味のなかった人に関心を持ってもらうためにも、例えば保険料から新しい介護ビジネスの資金を募り、豊中市はSDGsの達成に向け提案した取組みが国に評価され、今年度の「SDGs未来都市」に選ばれました。持続可能な循環型社会の新しい試みの中に介護に関するものがあったらいいですね。また、豊中

など思いますが。また、以前から比べてだいぶ認識されているとはいえず、もっと介護を当たり前の問題として捉える

はものづくりのまちという側面もあります。介護事業所以外の企業の皆さんとも連携し、意見を向う中で新しいアイデアや技術が生まれるかもしれないですね。

野津 先日、介護保険事業者連絡会は災害時の協定を市と結びました。私たち事業者には、地域社会への貢献がこれからますます求められるところだと感じています。

宮城 認知症の増加を考えると、地域を支えるしくみや早期発見と同時に重度の方を支える取組みも必要です。一方、介護保険と共に生きがいつくりや社会参加など別の角度から、また交通システムや住宅など全て含めたまちづくりの中で高齢者を支えていくように考えていきたいと思っています。具体的には、今後8期の介護保険事業計画の方向性を出していく予定です。

牧里 豊中は交通の便がよく人口が流動するまちです。これは重要なこと。新たな介護の知識や経験が入り、またこのまちで得たものが全国の介護に生かされるよう、これまで以上に事業者、医療者、行政の連携や一人ひとりの支え合いで豊中の介護をますます活性化させ、ネットワークを広げていければと思います。本日は貴重なお話をいろいろ伺いました。